

---

# クリニックの外来診療

# 保健会館クリニックの実施成績

金子昌弘

東京都予防医学協会  
健康支援センター長・保健会館クリニック所長

## はじめに

東京都予防医学協会(以下、本会)に所属する保健会館クリニックでは、1階で一般的な内科外来、専門外来、外来栄養指導、小児の慢性疾患に対する相談や指導、上部および下部消化管内視鏡検査を行い、3階で婦人科および乳腺に関する外来と検査を行っている。

当クリニックは次の2点を目的に設置されている。

第1は、健康診断や各種がん検診で異常を指摘された受診者への精密検査である。異常が指摘された受診者をすべて専門医療機関に紹介してしまうと、それらの施設の機能がマヒしてしまう可能性もあり、また紹介された受診者の時間的あるいは精神的な負担も強くなる。また、精密検査結果が必ずしもすべて把握できるわけではないので、異常と判断した結果が正しかったのかどうかを判断することもできなくなってしまう。

当クリニックでできる範囲の予備的な精密検査を行い、「異常なし」「定期的な経過観察」「専門病院への紹介」などに振り分けることで専門病院および受診者の負担軽減を図ることが可能となり、1次検査の結果を確実に把握することでその精度向上にも役立つと思われる。

第2は、地域に密着した医療機関としての立場である。当クリニックは近隣住民のための地域医療の一端を担っており、一般的な内科的疾患や婦人科的な疾患の診断および治療を行っている。新宿区の医師会にも所属しているために、医師会が新宿区から

受託して行っている区民の健康診査および各種のがん検診を行うとともに、がん検診における2次検診の役割も果たしている。

## 各外来の実績

各外来受診者および上部・下部内視鏡の検査数の推移を表1、表2、表3に示す。

2019年度は、新たにスタートした外来、あるいは中止になった専門外来はなかった。

当クリニック全体の受診者数は、東日本大震災や保健会館本館の改修工事などの影響で一時は全体的に減少傾向にあったが、この5年間は全体としては2万人以上が続いている。ただし本年度は後述のように甲状腺外来の縮小により前年より2,000人以上の受診者減少になっている。

また、地域医療の推進と医療の質向上に資することを目的として、近隣の大学病院をはじめ、国公立病院、総合病院、がんや循環器、感染症などの専門病院とも緊密な連携関係を維持し、紹介患者の診断・治療結果の把握にも努めている。

## 各部門の状況

看護部は14人の常勤者および15人の非常勤者が在籍しており、外来、人間ドック、施設内健診、出張健診などの診療の介助のほか、採血や各種の測定などの検査業務や看護業務をそれぞれ交代で担当している。このうち12人は衛生管理者の資格も有し、さらに5人は消化器内視鏡技師の資格も有し、上部、

表1 クリニックの10年間の受診者数推移

(単位：人)

科目	年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
内 科		4,645	3,890	3,846	3,566	3,049	2,829	2,941	3,165	2,727	2,174
消化器(肝臓病含む)		2,061	2,344	2,300	2,602	2,891	3,572	3,886	3,980	4,018	5,553
循 環 器		910	828	826	941	830	817	679	341	200	113
糖 尿 病		899	788	811	799	707	752	808	938	1,100	919
腎 臓 病		98	97	135	149	140	136	129	120	144	207
呼 吸 器(肺診断科)		683	674	896	641	694	733	673	723	787	729
整 形(骨粗鬆症)		157	122	101	100	23	—	—	—	—	—
乳 腺		1,549	1,253	1,551	1,537	1,552	1,604	1,723	1,705	1,474	1,501
婦 人 科		3,241	3,482	3,969	4,405	4,979	5,081	5,275	5,195	5,628	5,505
甲 状 腺		4,123	4,141	4,059	4,116	4,222	4,376	4,569	4,654	4,597	1,450
女 性(婦人科一般)		417	328	359	313	501	571	664	773	1,015	1,227
代 謝		175	154	121	120	95	111	93	107	38	35
禁 煙		69	56	45	25	49	54	33	51	7	12
呼 吸 器 内 科 (睡眠時無呼吸)		208	257	—	—	662	967	1,128	805	311	523
外 来 栄 養 指 導		28	21	24	32	35	50	48	59	54	38
腎 臓 病		13	22	20	14	9	37	19	30	29	17
貧 血		40	30	11	25	16	27	10	8	14	12
コ レ ス テ ロ ー ル		52	59	57	54	58	65	52	62	75	91
心 臓 病		145	117	138	131	159	156	150	141	121	122
脊 柱 側 わ ん		233	192	195	214	176	187	229	246	244	220
や せ 症		—	—	—	—	—	58	83	118	127	113
合 計		19,746	18,855	19,464	19,784	20,847	22,183	23,192	23,221	22,710	20,561

下部内視鏡の介助にも当たっている。

また看護部の看護師は、がんに関する精検結果の追跡調査を分担して行っており、各担当の看護師の努力により追跡調査が行われている。看護師はこの他、本会内危機管理委員会の下部組織であるリスクマネジメント部会にも参加しており、その活動により業務マニュアルは日々更新され、インシデントは減少し、看護業務の健全化が図られている。

医事課には常勤4人、非常勤4人の職員が在籍し、4人は衛生管理者の資格を有している。当クリニックには、近隣地域のみならず、首都圏広域から受診者が訪れ、その内容も複雑多岐を極める。複数の診療科が同時に進行しているので、業務の正確性、効率化を日々追求し努力を重ねている。当クリニックでは保険診療に関する個人情報を取り扱っているため、職員に対して個人情報保護法に基づく教育を日常的に行っている。

現在、当クリニックで電子化されているのはレ

セプト関係と放射線、内視鏡、超音波の画像関係だけで、いわゆる電子カルテの導入が行われていない。電子カルテの導入は世の趨勢であり、単に個々の医療機関だけでなく、複数の施設がデータを共有することによる受診者の囲い込みなどの動きも始まっており、当クリニックの最大の課題と考えている。

医師に関しては、常勤医は内科系4人、婦人科2人、乳腺科1人の7人で、外来診療や内視鏡検査に関してはそれぞれ複数の非常勤医師も参加している。それぞれの担当を次に示す。

### 内科外来

内科外来には専任の医師はおらず、消化器外来、循環器外来、糖尿病外来担当の医師が、それぞれの専門外来と同時に行っている。「高齢者の医療の確保に関する法律(以下、高齢者医療確保法)」に基づく特定健康診査および「健康増進法」に基づく健康診査・がん検診を地域住民に対して実施しているが、

近隣の住民が各種の症状を訴えて受診する場合も少なくない。

当クリニックの設立の目的に地域医療への貢献があるので、個々の専門にとられない総合内科的な外来担当医の存在も望まれている。

### 消化器外来

消化器外来は川崎成郎医師が2018年10月から常勤医師として着任し、増田あい、松村理史、大久保理恵の各非常勤医師とともに担当している。上部消化管造影での要精検者や便潜血反応陽性者に対する説明や内視鏡検査の受診勧奨と手続き、良性疾患に対する治療や経過観察を行っている。腹部超音波での有所見者に対しては、国立がん研究センター中央病院および日本大学病院と提携し、精密検査や経過観察を行っている。

また、東京都に肝臓専門医療機関の届出を行い、肝臓専門外来を実施している。2019年度は、B型、C型肝炎の薬物療法も実施しており、良好なSVR(ウイルス駆逐)を得ている。肝炎治療の公費負担制度により受診者は増加しつつある。最近、非B、非C型の肝細胞がんが散見され、その多くは非アルコール性脂肪肝炎に起因する。生活習慣病であり、今後の大きな課題である。

### 循環器外来・心臓精検外来

循環器外来は川井三恵医師が2017年4月から担当しており、職場等の健康診断で不整脈や心雑音などの異常を指摘された受診者への説明や追加検査、精密検査機関への紹介が行われている。以前は一般的な高血圧などの診療も行われていたが、心臓精検外来としての立場が強くなり、外来での高血圧などの管理が行われなくなり、受診者数はむしろ減少傾向にある。

### 糖尿病外来

糖尿病外来は西尾理恵、大平理沙、谷山松雄の各医師が担当し、健診で尿糖や高血糖などが指摘され

糖尿病が疑われた受診者に対しての精密検査や、その後の治療が継続的に行われている。

### 腎臓病外来

腎臓病外来は濱口明彦医師が担当し、健診で尿タンパク陽性、血尿あるいは腎機能低下が疑われた例に対しての説明や再検査、あるいは精密検査機関への紹介、経過観察などが行われている。

### 肺診断科外来

肺診断科外来は金子昌弘、奥村栄、文敏景の各医師が担当し、健診や肺がん検診の胸部X線で異常が指摘された受診者のCT撮影や、喀痰細胞診の再検などが行われている。最近CTで微小なすりガラス状の結節が発見される頻度が高く、これらの定期的な経過観察例も増加している。肺がんが疑われる場合には、国立がん研究センター中央病院やがん研有明病院、あるいは受診者の利便性も考慮して適切な医療機関に紹介し、結核や非結核性抗酸菌症が疑われる場合には感染症の専門病院に紹介している。

### 乳腺外来

乳腺外来は坂佳奈子が担当し、本会の乳がん検診で要精検となり、当クリニックを希望された受診者が中心であるが、他機関での要精検対象者や地域住民の有症状患者の精密検査も受け入れている。

マンモグラフィや乳房超音波検査などの画像診断を行い、必要に応じて乳頭分泌物細胞診、穿刺吸引細胞診など質的診断も実施している。

乳がん患者数の増加や社会的要望の高まりにより、外来患者数は増加しており、軽症例は検診に戻すようにして、精密検査が必要な患者が速やかに受診できるように外来予約枠の確保に努めている。紹介病院については受診者の利便性や希望に応じて多数の基幹病院と連携し、受診者がよりよい治療を受けられるように配慮している。

## 甲状腺外来

甲状腺外来は岩間彩香医師が担当している。2018年度まで担当していた百浜尚子医師が定年退職され別施設に移られ、患者さんもそちらに移動したため、今年度は前年度に比べ3,000人ほどの減少になっている。

甲状腺疾患の治療には定期的な甲状腺ホルモンの値の測定が必要で、本来は最初の受診日に採血を行い、次回にその結果を見て服薬量を決めるが、遠方からの受診者も多いので、状態が安定している患者には結果をはがきで知らせ、結果を聞くためだけに受診しなくてもよいようにするという患者サービスにも努めている。

また、妊娠中の甲状腺ホルモン異常は母子へさまざまな悪影響を及ぼすので、妊娠初期の甲状腺機能検査のスクリーニングは大きな意義があり、現在乾燥ろ紙血を用いてスクリーニングを実施している。

## 婦人科外来

婦人科外来は木口一成、久布白兼行、西野り子、齋藤英子の各医師と、慶應義塾大学病院からの派遣医師で診療が行われている。

東京都産婦人科医学会の会員より紹介された受診者、および本会施設で実施した子宮がん検診や人間ドックにおいてベセスダ方式でLSILとされた例やHPV感染例に対して、コルポスコピー検査、細胞診および組織診を併用して子宮頸がんの早期発見に努めている。

## 女性外来

女性外来は金子容子、増田美香子、松田美保の各医師が担当し、がん以外の婦人科疾患についての診療を行っている。検診受診例以外にも近隣地域住民の受診が極めて多く、外来枠を増やして対応している。

## 代謝外来

代謝外来は石毛美夏医師が担当しているユニーク

な外来である。新生児スクリーニング検査で発見されたアミノ酸代謝異常症（フェニルケトン尿症など）や、小児糖尿病検診で発見された2型糖尿病などを対象に、小児から成人に至るまでの成育医療を実施している。

## 呼吸器内科外来、睡眠時無呼吸外来、禁煙外来

呼吸器内科外来と睡眠時無呼吸外来は福田紀子医師が担当し、7月より中園智明医師が新たに担当に加わった。禁煙外来については福田紀子、金子昌弘の両医師で担当している。

呼吸器内科外来では、健診や自覚症状でCOPDや喘息などの慢性的な呼吸器疾患が疑われた受診者への診断や治療が行われている。

睡眠時無呼吸外来に関しては、一時期医師が不在で中断していたが、2014年から再開し、タクシー・バス会社の健診に協力して、疑わしいドライバーを積極的に受け入れて診断と治療を行っており、受診者数も増加している。

禁煙外来は、2007年4月に施設基準の届出を提出し、禁煙外来を開設した。当初は小野良樹医師のみが担当していたが、現在は上記の医師が担当している。

## 外来栄養指導

外来栄養指導は管理栄養士が交替で担当しており、健診で肥満などを指摘され指導を希望した受診者に対し個別に行っている。受診者は増加傾向にはあるものの、認知度が低く十分に利用されていない。各種疾病の予防のために重要な指導なので、充実を図る必要がある。

## 小児健康相談室

小児相談室においては、脊柱側弯症を南昌平、磯部敬二郎の両医師が、貧血を前田美穂医師が、腎臓病を村上睦美医師が、心臓病を浅井利夫医師が、コレステロールを岡田知雄医師が、思春期やせ症を鈴木真理医師が引き続き担当している。詳細に関して

表2 年度別の上部内視鏡件数と生検数・がん発見数

年度	上部内視鏡件数	生検数	胃がん発見数	食道がん発見数
1999	1,549	1,004	28	—
2000	1,610	941	42	—
2001	1,739	1,111	29	—
2002	1,679	931	23	—
2003	1,531	757	18	—
2004	1,623	737	10	—
2005	1,743	708	21	—
2006	1,695	697	18	—
2007	1,514	561	13	—
2008	1,611	556	26	—
2009	1,684	457	16	2
2010	1,684	418	10	2
2011	1,672	374	8	1
2012	1,524	302	13	4
2013	1,817	287	17	5
2014	1,928	209	7	5
2015	1,690	249	14	4
2016	3,496	343	16	7
2017	4,003	495	17	0
2018	4,317	499	15	1
2019	4,752	413	10	0

表3 年度別の大腸内視鏡検査数・ポリープ切除数・がん発見数

年 度	大腸内視鏡検査数	ポリープ切除	紹介件数	大腸がん発見数
2015	454	16	29	5
2016	578	121	118	22
2017	663	293	100	18
2018	686	156	95	11
2019	690	164	103	11

は学校保健の項を参照されたい。

### 内視鏡センター

上部消化管の内視鏡は川崎成郎、松村理史、竜崎仁美、赤井祐一、増田あい・加藤理恵および昭和大学グループの各非常勤医師によって、同時に2室で検査を行っている。検査の対象は上部消化管造影での有所見者、内視鏡での経過観察者、人間ドックでのオプションとして内視鏡を選択した受診者になっている。検査件数自体は増加しているが、人間ドックのオプションでの実施が増えていることにもないリピーターも増えており、発見胃がん、食道がんの数の増加の程度は少ない(表2)。

胃がん検診における内視鏡検診の有効性が証明され、自治体の胃がん検診でも採用する地域が増えているので、今後の検査数の増加が見込まれている。

下部消化管の内視鏡は川崎成郎、鈴木康元、赤井祐一、竜崎仁美、大久保理恵の各医師が担当している。2015年度から週3日、1室で開始したが、2016年度からは月曜から金曜日まですべて午後1室で行えるようになり、検査件数も増加している。ただし上部消化管と同様にリピーターが増えていることから、導入直後に比べると発見大腸がんの数は減少傾向にある(表3)。

下部消化管内視鏡検査の対象は、本会でやっている職域や住民の健康診断や大腸がん検診、人間ドックでの便潜血陽性者に対する消化器外来からの依頼例が大半を占めている。年間1,000例程度の検査が可能であり、現状ではまだ余力が存在している。周辺の施設とも積極的に連携して地域医療にも貢献していく必要があると思われる。

## おわりに

保健会館クリニックの外来は、他の一般の診療所とは異なり、自覚症状を有する受診者は少なく、大半は健康診断や各種がん検診、人間ドックなどで何らかの所見を指摘され、精密検査やその後の経過観察のために受診しているという特徴がある。また、健診の内容が多岐にわたるため、臓器や疾患別に検査の流れも異なり、業務は非常に複雑だが、受診者の多くは日常的に社会生活を送っている人なので、大半の外来では時間ごとの予約制にして、待ち時間

なく診療できるように努力している。

地域医療へ貢献するためには、専門外来も重要であるが総合的な内科外来の充実も今後は重要と考えている。

一部の診療科や下部消化管内視鏡などではまだ余力があるので、マンパワーや医療機器の有効活用を図りたい。

電子カルテは、医療の効率化や安全性の確保、近隣医療施設との連携のためにも不可欠になりつつあり、早急に導入しなければならない。